

歴史散歩



美濃夜神社の棟札

芸濃総合文化センター2階の芸濃郷土資料館では、芸濃町雲林院にある美濃夜神社の棟札13枚を展示しています。

棟札は建物の新築や再建、修理の記録として、建物内の棟木や梁に取り付ける板で、建築や修理などの目的、その年月日、建築主や大工の名前などが記されるものです。

古くは溝淵大明神と呼ばれた美濃夜神社には、平安時代後期から江戸時代の棟札34枚が残っており、そのうち32枚が三重県の文化財に指定されています。

その中で最も古い年号の康和5(1103)年が記された棟札は、長辺57.5cm、短辺36.7cm、厚さ3cmほどのひのき材で、板面は摩滅したり、後世に上書きされた痕跡があったりして、本来の文字の判読が困難となっています。そのため寛元2(1244)年に書き写されたこの棟札の裏面を資料館で展示しています。そこには康和5年に造営があったことや、久安5(1149)年の年号が記されています。

中世の棟札のうち、寛元2年の造営を記した棟札は、長辺156cm、短辺19cmの細長いひのき材を横方向に使用しており、造営には雲林院だけでなく、忍田や椋本などの近隣の村々関わっていたことが記されています。

また、弘治元(1555)年の鳥居寄進の棟札には、寄進者として「大檀那雲林院工藤高均」の名が記されています。雲林院氏は、当時、長野(現在の美里地域)を本拠地に安濃郡や奄芸郡を領有していた長野氏の一族です。神社裏手の山頂には雲林院氏が城主とされる雲林院城跡があ



弘治元年の棟札

り、この地を支配した雲林院氏を知る上で貴重な資料となっています。

江戸時代後期になると、棟札には美濃夜神社と記されるようになり、さらに明治41(1908)年に雲林院に所在する16の神社が美濃夜神社に合祀されました。これにより、それぞれの神社に伝わっていた棟札が美濃夜神社に集められ、34枚もの棟札が残ることになったと考えられます。

芸濃郷土資料館に展示する棟札は、雨乞いの謝礼、井堰の溝掘り下げ、新田の寄進、獅子頭の新造など、内容もその形もさまざまです。これらは地域の歴史とともに当時の人々の暮らしを今に伝えています。



資料館に展示されている棟札

